

東から西へ

吉崎正弘

渡島線

普段、我々は「自分がどうしてここにいるのだろうか？」などと考えて暮らしていることはない。そして、交通機関の発達により、行きたいと思えば地球上なら大概のところに行くことができる。一方、鳥にはハネがあるので広範囲に移動できるし、クジラは地球規模で泳いで移動できる。しかし、泳げなかったり、ハネやその代用品たる飛行機を利用できない生き物、特に昆虫はあまり遠くに速く移動できない。

たとえば、オオルリオサムシという美麗な歩行虫がいるが、これは翅が退化しているので移動するには歩くしかなく、北海道には生息しているが本州にはいない。一方、近縁のマイマイカブリはどちらにもいる。これは、マイマイカブリが日本に渡ってきたころには本州と北海道はまだ陸続きであったので歩いて移動できたが、それより遅れてオオルリオサムシが北海道に入ってきたころには、本州とはすでに海で隔てられていて、渡れなかったことを意味する。「ツキノワグマが本州、ヒグマが北海道」と分かれているのも同様で、生物学的には北海道と本州の間には「渡島線」という目に見えない境界線があるのである。JRの線路とは関係ない。

ただ、「海で隔てられて」といっても、台風により台湾などから先島に蝶が飛ば

されてくることがある。昆虫業界ではこれを「迷蝶」と呼ぶが、食草などもあって累代繁殖することがある。しかし、その場合も気温などのため数年で死に絶えることが多い。生き物は新天地に行っても、その場所の環境が適合している場合には定着できるが、気温・餌・競争種の存在など、環境が合わないときには、その地に定着することはできない。たまたま、日本に来た外来の生物があっても、環境が合わず定着できないことがほとんどである。このように、たまたま日本に来た外来種を「偶産種」という。

傲慢にもヒトは太古から全地球上で暮らしてきたように錯覚しがちであるが、ある生物はいつでもどこにでもいるものではない。生き物は、特定の環境下（地域・時代）で生息するものであって、進化と絶滅を繰り返しているのである。

西から東へ

本来は海を渡れない昆虫が台風以外の原因で海を渡ってしまうことがある。写真のリュウキュウリボシカミキリは、八丈島で採ったものである。名前のおり本来は沖縄が原産であるが、枯れ木の中で生育している幼虫が棲家ごと流され、海流に乗って八丈島に漂着し、そこで累代定着したものである。定着したのはかなり昔のことらしく、現在では沖縄のものとは異なる

進化ををはじめ、亜種分化している。この種以外にも、海流によって、高知県・和歌山県・千葉県などの半島で局地的に定着している昆虫はけっこう多い。

また、人間が移動に手を貸した例も多い。最近では、ゲーム・フィッシュとしてのブラックバスの放流が生態系を混乱させて、漁業関係者から問題視されるに至ったことはよく知られている。

写真のラミーカミキリも元々は朝鮮半島の産で、乳牛の模様を髣髴とさせる柄である。この種は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に物資にまぎれて日本に入ってきたものであるが、ブラックバスと異なり意図的に移入されたものではない。以後、九州に定着し以後すこしずつ東進し、筆者が学生のころ初めて奥多摩で採集し驚いたものである。現在では、関東では普通に見られる当たり前の種となり、東北地方南部まで生息エリアを広げている。

このほか、クマゼミやモグラなど、西から東へ領土拡大している生物は多い。また、文字や稲作も西から伝来したし、黄砂も西から飛んでくるが、これらは本稿とは関係ない。

東から西へ

「地球の回転の方向からして、西から東への生物移動は必然なのだろうか？」と思ったことも子供のころにはあったが、東から

ラミーカミキリ
Paraglenea fortunei (SAUNDERS,1853)
2004年6月5日 千葉県富山町富山
体長13.2mm

アオオサムシには、房総半島南端にだけ生息する亜種(アカオサムシという矛盾した名前)がいる。前の週かけた捕獲用のトラップを回収するために早朝の特急に乗った。梅雨には珍しい晴天で、食草のカラムシにはラミーカミキリが乱舞していた。感激はもうなかった。



リュウキュウルリボシカミキリ
Glenea(Glenea) chlorospila GAHAN
2007年5月20日 東京都八丈島防衛道路
体長8.2mm

有線放送時代の仲間と旧交を温めに行った八丈島でのことである。風の強い日だった。どこへ行っても体感温度が低く、人間にとっては観光日和だが、昆虫の姿は少なかった。レンタカー返却の時間が迫ってきたとき、珍しく無風の藪で見つけた。



西へ移動した例もある。

コロンブスが新大陸を発見した後、ヨーロッパとアメリカの交易は急速に進んだ。ただし、最初のころはアメリカ大陸からの物資の輸送が多く、ヨーロッパから運ぶものはそれほど多くなかった。したがって、ヨーロッパ発の空の船底には土砂を敷き詰めバランスを保って航行し、帰りには新大陸の物資を満載してヨーロッパに戻った。往路、新大陸が近づくとハドソン川の河口付近で船底の土砂を捨てて港に入ったが、この土砂の中にヨーロッパのゴミムシが紛れ込んでおり、いくらかは新大陸に漂着し定着した。そしてその中には、長い時間をかけて西進し、生息エリアを広げたものもある。

このように、「東から西」もあるのである。

放送コンテンツの海外展開考

韓流ドラマのせいか、「キムチは焼肉屋でオヤジが食べるもの」と断じていた我が家の同居人が、「カプサイシンは体に良いから」と訳の分からぬ正当化をしながら、一人でキムチをむさぼるようになった。ベトナムでも韓流ドラマは隆盛で、スポンサーの韓国の化粧品が売り上げトップになっているそうである。そういえば、昭和20年よりは前敵国として忌み嫌っていた米国ではあるが、戦後ハリウッドの映画や

ディズニーのテレビ番組などにより、「アメ車、冷蔵庫、ステーキ、アイスクリーム」と憧れの国に変身した。このように、映像情報の持ついわゆる「ソフトパワー」はとても大きいものである。しかしながら、日本のコンテンツの海外発信は多くない。

ただ、映像コンテンツは「これからの日本の飯のタネ」としての可能性は大きく、観光や日本食など関連産業への波及効果も大きい。加えて、前述のソフトパワー効果により、日本に対して好意を全般的に持ってもらうことも期待できる。このようなことから「クールジャパン」が現在大きな政策課題として取り上げられるようになり、放送コンテンツの海外展開が強く進められている。

もちろん、これまでアニメを中心とした日本発の成功例も少なくはない。たとえば、朝のドラマの「おしん」が東南アジアで大ヒットしたことがある。日本が高度経済成長を遂げ、アジアの国々から「頑張れば日本みたくなれる」という羨望の思いがあった時代、当の日本は「俺たちはアジアではなく欧米と一緒に」というやや尊大な気持ちもなくはなかったように思われる。ちょうど、明治時代の富国強兵・殖産興業の政策が当たって植民地化することもなく列強の仲間入りしたころと同じように、、、ところが、たまたま海外進出した「おしん」を見た人たちは、「立派に

なった日本もあんな艱難辛苦の時代を乗り越えてきたんだ。我々も頑張ろう」と日本にシンパシーを感じるとともに、勇気づけられたという。

ただ、後が続かなかった。大きな原因は「ほどほどの国内市場」のためか、海外進出を意識した番組制作と提供がなされなかったところにあるように感じられる。「おしん」は偶産種であったのである。現在の韓流ドラマの成功は、特に立ち上がりのころ、ベトナムや日本の視聴者の好みを事前に十分にマーケティングしてから現地展開したところにあると思っている。「日本で良いものは他国でも良いもの」という機械などと異なり、現地の歴史や文化に好みが大きく左右されるのがコンテンツである。日本のヒット作が海外で受けるとは限らないのである。

これからの海外展開には十分なマーケティングが必要であるし、現地との共同製作も効果的である。現地テストに虚心坦懐で取り組んでいくことが成否を分けると思っている。リュウキュウルリボシカミキリのように遠く離れた新天地に同化し定着できるか、それとも一過性の「迷蝶」で終わるか。それはどれだけ視聴者目線になれるかにかかっているといって過言でない。

